

祐天寺と団十郎

— 初代〜五代目の信仰の問題 —

一 過去振にみる歴代団十郎

目黒にある浄土宗祐天寺は、江戸中期の高僧、祐天上人が開祖であり、本尊としてその真影が祀られている。弟子の祐海上人が、師の没後享保三年に、それまであった庵室善久院をもとに起立し、祐天上人を開祖として自らは二世となった。

祐天寺に数種ある過去帳のうち、最も古く言写され、又、最も大部なもの、十世祐麟上人（嘉永六年在住）言写の『祐天寺本堂過去霊名簿』である。中には大名や大奥の女中、町人等の法名が多く納められるが、この中に実は市川団十郎とその関係者の法名がいくつかみえるのである。没年順に表にしてゆく。団十郎菩提寺である芝増上寺塔頭常照院の法名と比較して違う点もいくつかある(1)。

法名の左に書いてある名は、当人の俗名のこともあるし、施主のこともある。

又、戒名の中の「誉」の字は誉号といい、浄土宗で用いる法号の一つである。『浄土宗大事典』（山喜房）によると、「第五祖定慧よりはじまる。(中略)後世、檀林制度の確立とともに、この誉号は

五重相伝を受けたものだけに授与されることとされ、現今では結縁五重を受けた在俗信者にも授けられている」というものである。

①は初代妻お栄。目黒に隠居してから栄光尼といったとう(2)。
③の施主は、没後すぐ位牌を寺に納めたとすれば、時代からいつ

人物	祐天寺過去帳	常照院
①初代妻栄光尼	寛延三年十月(八日) 精誉栄光壽林法尼 海老蔵妻栄順	寛延三年十月八日 精誉栄光壽林法尼
②二代目団十郎	宝暦八寅九月(二十四日) 法誉柏莖随精信士 市川海老蔵	宝暦八年九月二十四日 法誉柏莖随精信士
③不明、四代目が施主	宝暦十一年巳三月(八日) 報誉妙蓮信女 市川團十郎	
④四代目団十郎	安永七戌三月(一日) 廊誉悟粒随然法子 市川團十郎父	安永七年三月一日 廊誉悟粒随然法子
⑤五代目団十郎	文化三寅十月(二十日) 還譽浄本莖遊法子 五代目市川團十郎白猿	文化三年十月晦日 還譽浄本莖遊法子

浅野祥子

て四代目市川団十郎のことだと思われる。しかし、常照院過去帳に該当する法名はないそうであるし、伊原青々園の「堀越家系譜」(2)にも見当たらない。どういう縁故の女性なのか、今のところ不明である。

④身園の系譜では、没年月日が「安永七年二月二十五日」となっている。青々園は市川家の資料に依ったのだろうが、或いはなくなった日より後の日付けで寺に届けたものか。

では、どうして何代もの団十郎とその関係者の戒名が、祐天寺の過去帳にあるのだろうか。それを考察してゆくのを本稿の主題とする。

一般人の戒名が過去帳にあるという事は、位牌を寺に納めたという可能性が高い(墓のある菩提寺以外にも位牌を納めることはしばしばある)。祐天寺にはかつて人々がたくさん位牌を納めに来たことが、寺の記録にも残っている。『明顕山寺録撮要』(3)第二巻には、

年々諸方より位牌相い納め候ところ、年々の儀故位牌数多に相いなり、本堂に納めかね難儀仕り候

ところへ施主があつたとして、寺社奉行に申請し、帰依者瑞泰院(長門侯毛利重就室)の寄付による不断念仏堂を建てている。棟札の名称は不断念仏堂(浄業堂ともいった)で、常念仏を修していたが、位牌を納める場所でもあり、位牌堂とも呼ばれていた。六世祐全上人代、宝暦七(一七五七)年の建造である(その後位牌堂は老朽化して取り壊され、今はない)。位牌を納めた人々は、開祖祐天上人に結縁を求め、又、常念仏の中にあることで、往生極樂は必至と考えたのであろう。

二 祐天寺と祐天上人の信仰

団十郎が位牌を納めた理由として、まず考えられるのが、開祖祐天上人への信仰である。上人の伝記をふり返りながら、祐天上人がなぜそんなに庶民の信仰を集めたかについて考察してみたい(4)。

1 祐天上人と不動明王

祐天上人は寛永一四(一六三七)年四月八日、奥州磐城に生まれた。九歳の時、増上寺にいた叔父休波上人について出家し、やがて檀通上人のもとで修行することとなった。修行時代に特筆すべき伝説は、成田不動尊による奇瑞である。

『祐天大僧正傳記』(5)等によると祐天上人は、僧侶としての学問が非常に苦手であったという。愚鈍で、初歩中の初歩である四誓偈の暗誦すら、一句覚える間に前の句を忘れてしまうという有様であったという。師にも見放され、思いつめた祐天上人は、増上寺開山堂に参籠し、お告げによつて更に、成田山新勝寺に籠もり、三七日の断食行をした。満願の日の夜、不動明王が現れ、祐天が智徳を授かりたいなら、長短いずれかの剣を呑んで臍腑の悪血を出すと言われる。それを聞いた祐天は、どちらの剣を呑んでも死ぬことから、長剣を吞ませていただきたいと言った。明王が長剣を祐天の口に差し込む途端に祐天は氣絶したが、以後、他に比類なく学問に優れた僧となったというのである。

2 善導寺か成田山か

しかし、実際には、祐天上人が若年の時参籠したのは、師について赴いていた館林善導寺の不動尊であつて、成田不動に関するこの

伝説は、実は、西誉上人の法系である増上寺第九世道誉上人貞把和尚の説話が、祐天上人のもので誤って伝えられたものようである。『縁山悲』の貞把和尚の項を引用する(6)。

(説場で言葉につまり、聴衆に笑われた貞把は・筆者注) 下総国成田不動尊に詣で懇祈する事三七日明王仮寝に託し現形し両手に利鈍の二剣を提示しいはく汝將に何れをか呑んとするや師の云く利剣を呑んとす明王利剣を振ひ師の喉を裂破す即ち血を吐く事升餘にして甦る然れども身に痛悩を覚へす 今籠澤山に鈍血の劔あり成田山開帳の時はこれを結縁せしむ世人此師を祐天公と違へり しかしより日々数万言を暗誦し頭密に通して内外を涉閱す

貞把上人の逸話を祐天上人の話として誤って伝えたのは、高名な祐天上人と、成田山とを結びつけることにより、成田山の人気を高めようとする、仏教側の思惑があったと伝えられる。初めに参詣したのが開山堂(開山西誉上人)だということも、西誉上人系の貞把上人の話であることを裏づける。

田村周助は『祐天上人實伝』(7)で、

最近二十年前までは、成田で、實物縦覧の度毎に、大巖寺(開山貞把上人・筆者注)の什實を借受けて使用した。(中略)成田の役僧某等潜在考ふる處あり。傳手を求めて上人に近き、某の名を籍つて不動尊利益の程を知らしめたいと、一向懇請した。すると上人其れ熟れも衆生済度の方便であるから、苦しくないとの免許を出された。

と解説している。

ともかくこの話は広く流布し、南北の『法懸松成田利剣』にも影響を与えている。第一番目菴端夢の場で、大小二夕振の劍を携えた不動明王が、暗愚な祐念に、長劍を吞ませるくだりがあるが、これは、祐天の伝記を利用しているのである。南北は勿論ずっと後代の人であるから証左にはならないが、祐天上人在世中から、祐天上人と成田山との結びつきが顕伝されていだとすると、おもしろい問題である。

ここで団十郎について考えてみたいが、青江舜二郎氏は、団十郎の祐天信仰について述べておられる(8)。団十郎の先祖は甲州武田家に仕え、武田家滅亡後、下総国殖生郡幡ヶ谷に住みついた。青江氏は、幡ヶ谷に近い館林善導寺退去帳に、団十郎の親戚とみられる、堀越姓で重のつく俗名の者が数名載っていることから、団十郎の先祖の菩提寺は善導寺である、善導寺には祐天上人参伍不動尊があり、それで祐天信仰をもつようになった、故に、市川家にとっては、祐天不動、との結びつきが在所以来で、成田不動との関係は出府後である、と述べられる。

氏の説は、団十郎の祐天信仰暮仰をとり上げられ、真に卓見であるが、問題もあると思う。まず、善導寺過去帳の法名は、氏の挙げられた中では宝曆七年が最古だが、それはもう四代目の時期のものであり(二代目は存命だが翌年没する)、初代の父の出府(正保年中)(2)以前から菩提寺であったかどうかわからない。また、田舎では、一地方ほとんどの住民が一姓を名乗っていることが珍しくなく、姓と名の一字が一致したからといって、温い親類とは断定できないのである。

因みに、幡ヶ谷にほど近い祐天上人の累済度で有名な羽入村はほ

とんどの住民が堀越姓であり（現在もそうである）法蔵寺曇過去帳（9）にも累一族である堀越与右衛門の代々の名の他に、堀越金左衛門、堀越茂左衛門等、堀越姓が多い（二代目は後に累の芝居で与右衛門役を演じているが、先祖の出身地の靈験譚を演じるという意識が強かったのではないかと思う）。

祐天はこの水海道羽入村で、寛文一二（一六七二）年に、キクに憑いた累の霊を得脱させるという大法力をあらわしており、周辺の信仰はたいへん篤かった。それが伝わって江戸の団十郎の祐天信仰のきっかけとなったというのは、おおいに可脂性がある。出身地の影響としては、善導寺はともあれ、まずそのことを考えるべきである。

しかし、二代目が祐天上人を信仰していたのは後でわかるように確かだが、初代団十郎に関しては、出身地の靈験譚は承知していただろうが、どの位祐天信仰をもっていったかについては確証がない。祐天上人の靈験譚は、地元には語り伝えられていたろうが、父の代から江戸に出ていた団十郎が強く意識したのは、やはり、『死靈解説物語聞書』が上梓され元禄三年以降ではないかと思う。

加賀佳子氏は、初代の書いた願文について翻刻・研究されており（10）、それにより、元禄三年、六年、九年の願文の内容が知られる。しかし、それらには、大山不動、三宝荒神、上野両大師（元三大師・慈眼大師）等へ信仰は述べられるが、祐天上人への信仰の程はわからない。

しかし、上人自身、貞享三（一六六八）年、増上寺を離れて以来、元禄一二（一六九九）年檀林大巖寺往職を拝命する迄は、隠居した牛島草庵を起点としながらも、旅が多かったことが知られ、所在は一定しなかったようだ。団十郎が信仰しても、それを現しようもな

かったともいえる。上人は、元禄一三（一七〇〇）年には檀林飯沼弘経寺住職となり、紫衣を賜わる。

初代団十郎が二代目と共に『成田山分身不動』を演じたのは元禄十六年である（11）。世間の祐天上人の評判は、まさに絶頂の時であったろう。もし、この頃既に、前述したように祐天と成田山との関係が巷説としてあったならば、初代は、祐天上人への信仰から、成田不動を信仰し始めた可能性もあるが、今、それを裏づける資料はない。市川家の祐天信仰は、二代目からは確かにあったが、初代ももっていた可能性は残る。

3 祐天名号

ここで、祐天上人信仰の中心となっていた祐天名号について述べたいと思う。累の濟度以降の話だが、祐天上人の書く名号が特別の功德があるといわれ始める。上人の名号は、火難除、水難除、剣難除、安産等様々の御利益があるとされていた。

二世祐海上人の著述で『祐天大僧正利記』序文には、（12）

此記に載る得益の中に。火に投ずれ共焼けず。水に入れ共溺れず。利剣も其身を傷つけず。死してまた蘇生する杯。種々の靈験多し。各段の下におひ評せんことの煩はしければ預め惣じて論ぜん。夫補處の居士觀世音を念じて。程よくか々る益を得る旨。法華經觀音等の經説おびた々し。本師弥陀の名号を称念せん者をや。

とあり、觀音は、火難、水難、刀杖難（觀音經——法華經普門品をさす——には、その他、岸から落ちる難、毒菓の難から免れる等、多くの現世利益が説かれる）等から人々を救うのだから、本師

阿弥陀仏は更にあらたかな靈験で衆生を災いから救う、と説く。観音経を根拠とした、観音への現世製の信仰は、古代からみられたものだが、江戸時代には殊に強く信仰された。

平安後期の末法到来（一〇五二年）以降、貴族の信仰の中心来世の阿弥陀仏のの極楽浄土への引摺となり、観音は独立した尊というよりも、弥陀の脇侍としての印象の方が強くなってゆく。

江戸時代は、徳川家の宗旨が浄土宗であることにより、浄土宗の力は強まった。しかし、社会の風潮は、「憂世」が「浮世」といわれるようになった事に象徴されるように、現実主事、刹那主義の傾向を強めていった⁽¹³⁾。往生でなくこの世での幸を求める諸人の現世利益の廟いに応える為に、浄土願求の浄土教でも、阿弥陀仏の現世利益を考えなければならなかったのである。阿弥陀の名号に新たに、観音の現世利益の功德がつけ加えられていった。

『利益記』の、名号の利益を説く文章には、このような背景が考えられる。

そして、『利益記』本文中には、それらの難から救われた人々の逸話が幾つも載せられている。中でも、剣難を免れた話は有名だったらしく、他の伝記類、又「鶯宿雑記」などの随筆にも出ている。後の説明と関わってくるので、紹介しておく。

元禄四年、本多中務侯の藩中で、蜂須賀田之助の下部に、門兵衛という者がいた。酒好きで、本多家の法事の席で狂酔して無礼をはたらき、断罪ときまった。

そこで門兵衛を引き出し、太刀で斬ったが、五度斬っても刃の痕もつかない。それならば突殺せと突いたが、二度突いても刃が身に立たない。本多侯も怪しんで、何か信仰をしているかと尋ねると、別に何も無いが、母親から祐天上人の御名号をおくられ、肌身離さ

ずつけているという。その御名号を調べると、七カ所の刀傷があった。昔、御名号の御利益であると感激し、本多侯は門兵衛を武士にとりたて、召し抱えたという。

4 将軍・大奥の信仰

さて、祐天上人の伝に戻るが、檀通上人の没後、上人は増上寺に戻る。しかし貞享三（一六八六）年に離れ、下縫国葛西領牛島草庵にひそかに隠居する。

その後上人は、牛島を基点として諸国を行脚し、各地で名号を書いて人々に与える。その名号の起こす奇瑞・奇蹟は評判に評判を呼び、声望はますます高まった。今でも各地の寺院や旧家に「祐天名号」がいくつも所蔵されている。

祐天上人の評判は、五代将軍綱吉の耳に達し、元禄一二年、下総国檀林大蔵寺住職、更に翌一三年檀林飯沼弘経寺住職となり、紫衣を賜ったのは前記の通りである。

宝永元（一七〇四）年には小石川伝通院の住職となり、ついに正徳元（一七一一）年、六代将軍家宜の命により、増上寺三十六世住職に任じられた。

このような急な栄達の陰には、民間の篤い祐天上人崇拜を聞き伝えての、大奥の女性達の帰依の影響が考えられる。そのいくつかを列挙しておく⁽¹⁴⁾。

宝永二（一七〇五）年の桂昌院の臨終の際には招かれて臨終行儀を行い、十念を投げている。又、綱吉の側室瑞春院は、祐天上人の姿を模した像をつくり、「長悦」と命名した。

綱吉息女松姫は、祐天上人真影（本尊）造像の費用を寄進した。綱吉息女（養女）竹姫は、阿弥陀如来像と阿弥陀堂を供養寄進し

た。又、本堂の本尊の宮殿も、竹姫の寄進である。

六代將軍家宣薨去の際には、臨終の導師を勤めたいたので、家宣室天英院は、祐天寺建立後、享保一四（一七二九）年、文昭院

（家宣）十七回忌追善のために、梵鐘と鐘楼とを寄進している。この値は時の鐘として昼夜一二時に撞き続けられてきた。又、天英院没後、千代田城大奥のその居間は解体され、八代吉宗によって祐天寺に寄進され、天英院のお霊屋に造られた。

家宣側室月光院は、祐天上人から、念持仏阿弥陀立像を頂いているが（後、祐天寺へ納める）享保六（一七二二）年、祐海上人を導師として落飾しているし（家宣没後に仏門に入っているが、改めて行った）、その布施物として、知恩院蔵のものを家宣が写した『法然上人行状絵図』を寄進している。又、享保七年、善久院を祐天寺と改名する時に、將軍吉宗に願い出たのも、月光院である。勿論、將軍各家も信仰篤く、八代吉宗は晩年の上人に対面後、「今の世に祐天のみ真の僧侶」と言つたと伝えられ、上人に蓮糸の袈裟を贈っている。

このように、享保以降、祐天上人及び祐天寺に対する將軍家と大奥の信仰は熱烈というような状況を呈していた。又、祐天上人の没後は、親戚にもあたる弟子の祐海が、祐天寺の基礎をかため、多くの伽藍を建立した。その経鼻は次の様である。

享保三年 祐天上人遺跡起立御免

四年一月 庫裏上棟

三月 書院上棟

六月 本堂上棟

九年四月 弥陀堂上棟

一四年 鐘楼建立

二〇年四月 表門（仁王門）上棟

こうみていくと、わずかな間に立派な伽藍ができていった様がしのばれる。そしてこれは、初代妻栄の後半生と、二代目團十郎の活躍期とまさに一致するのである。目のあたり興隆の棟を見ていたことも、信仰を寄せる契機となったことだろう。

5 栄光尼と二代目團十郎

元禄一七年に父、初代團十郎を失った九蔵は、すぐに、二代目を継承する。一七歳の若い團十郎に風当たりは強かったというが、次第に劇界での地歩を固め、後に市川家十八番の内となる「助六」「矢の根」「毛拔」などを初演する⁽²⁾。享保六（一七二二）年正月には森田座で曾我五郎を勤めて一〇月まで二八〇日間打ち続け、給金を一〇〇〇両とされる。これが千両役者の始まりという。

父亡き後の二代目を薫陶し、立派な役者に育てるのに、母のお栄（栄光尼）は非常に力を尽くしたという。

伊原青々園はこの栄光尼のことを、⁽²⁾

元祖の妻は亦淑徳を以て聞こゆ。能く門下を愍み、良人の死後も其の子二代目團十郎を薫陶して家譽を壁さぶりき。

と評している。また、この母は、晩年、團十郎の目黒の別荘に暮らしていたというが、それについては三章で述べる。

團十郎の関係者で、初めて祐天寺に位牌が納められたのは、栄光尼（施主二世團十郎）である。椿天寺に位牌を納めたのが、母子ど

ちらの意向によったかはわからないが、いずれがいい出したとしても異存はなかったろう。そして、その後二代目自身の位牌も納められ、三代目は抜けたものの、四代、五代の位牌も納められることとなる。

三 目黒の別荘

二代目団十郎（栢筵）には目黒に別荘があったという。その位置については、伊原青々園『團十郎の芝居』（15）に「栢筵の遺跡は今の雅叙園」という考察がある。

青々園は、『役者論語魁』に、栢筵が目黒の行人坂へ母を隠居させて、朱林庵といふ別荘を建てたとある記事」を栢筵の日記『老のたのしみ』の紀事で傍証して、別荘は、行人坂にあったと結論している。更に、明王院に隣接していた（『老のたのしみ』）ことと、明王院が紅葉の名所であったことから考えて、朱林（紅葉を意味する）庵は、明王院の地内だったかもしれない、としている。今、その跡は雅叙園となっているという。

青江氏（8）は、団十郎は祐天上人を慕って、祐天寺近くに別荘をもうけたという。後に書くように初代の位牌もおさめたとすると、その可能性は大きい。

二代目（栢筵）が直接、祐天寺の僧侶と交際があったという記録も栢建の日記類にある。その中で享保一九年六月一九日の記事は、栢筵と祐天寺との関係を探るうえで貴重な資料なので、次に引用したい。又、この記事の前五月一日の条には、増上寺大僧正が祐天寺に来られた折に、栢筵の家の前を通って乗物の中より声をかけた記事がある（16）。

十九日 晴ナガラ曇 亡父ノ御命日ナレバ祐天寺へ参ル行品
二三田宗玄老へ寄夫ヨリ百姓伝四郎方へモ寄 祐天寺へ参詣
祐海和尚御在院ニテユル／＼ト清談日課又二百ヘン夫婦共二
十念日裸早々、嘶ナガラノ御説法別ニ記ス（中略）祐天寺ニ参
詣方丈へ御目ニカ、ル折フシ 日中過方丈御隙ニテユル／＼
ト清談予ニハナシナガラノ説法夫婦トモニ又日課二百遍
品々御物語有テ 方丈日予小僧ノ時コナタ幼少ノ時勘三郎座
ニテ御親父碁盤忠信狂言オビタ、敷ハヤリ故見物ニ参リ候
扱々久シキコトカナト 夫ヨリ品々物語有テ 兵五郎ハカシ
ガラセント思ハデ出テモ出ルトオカシキ 兵介ハオカシカラ
セウト思フテ出ル故オカシカラズ コナタモコワガラセウト
思ハズ出ラレ候ヘトモ人はヨク見ル 一サイコト左様ナリ
ト 妙ト云ハ各別ノ所ニ有ト説法ニ引力ケ真実ノ物語感涙ス
酒出此酒ハ先日大僧正へ上候残ニテ候トテ 殊ノ外ノキゲン
ニテ物語有キ 口取ニコンニヤクト長芋ト醬油ニテ煮タル
葵ノ御紋ノ梨子地ノ小重箱ニ入八寸ニノセ出サレユル／＼ト
閑談 予ヒクキ家業ナガラカ、ルコト有難キ事哉ト 又々感
涙スモドリニ頭誉僧正ノ御舍利并ニ御舌并又石原ニ御閑居ノ
時 名号奇特ノ身替名号拝見ス 又々感涙ス帰リニウラ門ニ
テ茶店へ寄り弁当ヒラク（以下略）

「頭誉僧正ノ御舍利并ニ御舌」とあるが、御舌とは、祐天大僧正
が亡くなり火葬にした時、舌根が焼け残ったという。それを寺宝に
していたことが寺録にみえる。それを指すのである。又、「奇特ノ
身替名号」とは、おそらく、門兵衛に剣難を免れ得しめた名号を指
すのであろう。

引用した箇所について、青々園の「二世團十郎の日記」の解説を引用しておく。

四 累狂言と団十郎

祐天上人が羽生村の菊に取り憑いた累の霊を得脱させた話は、『死霊解脱物悟聞書』として文字化され、元禄三年出版されたところ、たいへんな評判をよんだ。

歌舞伎にとり入れられたのは、享保一六年お盆の市村座の『大角力藤戸源氏』が嚆矢である。作者は津打治兵衛、同九平次。役者は、果が三條勘太郎、怨霊になってからは市村竹之丞。與右衛門は新五郎である(17)(18)。この時は大当りとなり、中村座の生膽の大当りと合わせて、両度とも、それぞれの役者の家の狂言のように言ったという。そして、それより累の狂言には『死霊解脱物語』を日々三部ずつ配ったという。

二代目団十郎が累物に出演した最初は、元文四(一七三九)年市村座『累解脱蓮葉』であり、羽生村與右衛門、本名景清を勧めた。海老蔵を名のっていた時代である。系は袖崎菊太郎、怨霊は座元竹之丞である。

しかし、その後栢蕙が累物の狂言に出演した記録はない。次に「団十郎」が累の劇に出演するのは、宝暦五(一七五五)年、前年に名跡を継いだばかりの四代目である。中村座「信田長者柱」の二番目。新団十郎の役は累、海老蔵となった栢蕙が「浮島弾正ニテ空つんぼ」の役で出ている。

四代目はその後、明和七(一七七〇)年六月中村座の「敵討忠孝艦」に、古金買八兵衛、蓮生坊、あさりの與市の役で出る。名を息子に譲って松本幸四郎となる直前である。又、その翌年、明和八年七月に、中村座「田村磨七重累」でかさねのぼうこんを演じている。これは、かさねの百年忌をあてこんだ狂言であり、『実戯場年表』

ところで、ここで注意すべきは、六月一九日に父の命日だからという事で祐天寺に参詣していることである。初代の命日は元禄一七年二月一九日(青々園「年譜」と常照院過去帳共に)なので、無論、月の命日ということになるが、祐天寺が菩提寺常照院と同じ浄土宗だからというだけでは説明できないことである。これは、初代の位牌も祐天寺に納めてあったからだとしか考えられないのではないか。祐天寺過去帳には残念ながら、初代の法名は見つからないが、或いは、没年が早い(祐天寺建立以前)、位牌だけあったのではないかと考えている。

祐天上人は享保三年に遷化されているが、書かれた算名号は前述したように、水難除、剣難除等様々な利益があるといわれ、たいへん有名であった。中でも、二代目も見たいようである。剣難七太刀の名号は、祐天寺に納められ、有名であった。舞台上で生島半六に刺され、剣難による非業の死を遂げた初代の法名を納め、来世を祈るのに、祐天寺は非常に適していたのではないだろうか。

には、「七月二十五日祐天寺に羽生村かさね百年忌に付大法会執行、役者夢路夫がため群集して怪我人等も有之。三日の所一日にて差し止らる」という記事がある。

四代目は、団十郎になった直後、名跡を譲る直前に累を演じており、又、累百年忌の狂言でも果を演じている。栢庭以来累物を家の狂言と見做す伝統が受け継がれていたのではないかと思う。

五代目も累物を演じている。明和七（一七七〇）年幸四郎時代に「敵討忠孝鑑」で父と同じ舞台上で菊池兵庫役を勧めている。その他、安永七（一七七八）年七月中村座で「伊達競阿国戯場」で細川勝元役を勧める。又、天明五（一七八五）年九月中村座の

「稚馴染累詞」で與右衛門女房かさねと高坂弾正役を勧める。又、天明八（一七八八）年八月桐座「高雄宮本地開帳」で頼兼と片桐弥十郎役を勧めている。

しかし、こう並べてみると、累、或いは與右衛門役が少ないことに気がつく。これはどうしてであろうか。

渡辺保氏は『四代目市川団十郎』で四代目が団十郎襲名の時に、意識的に立役を増やしていった事を指摘され、名前と役柄のイメージが決まってきたとされる。五代目の場合もそれで、累物が家の狂言だという意識が薄れる一方で、団十郎＝立役のイメージに、殺人着與右衛門は合わないと考えたのかも知れない。

累物は南北により幾つもの傑作狂言が書かれ、七代目も多く演じている。しかし、（おそらく父祖の地の狂言として、そして）家の狂言として演じられたのは、四代目までだろう。

五 三代と五代目の浄土信仰・祐天信仰

栢庭が信心深い人柄だったことは、前掲の日記の中、夫婦で日課二百遍の念仏をすることになったところ等でもうかがえる。しかし、栄女と栢庭が祐天上人及び浄土宗を篤く信仰しているも、後代の人々の信仰が薄くては、このように何代もの位牌が納められることない。三代以降の信仰はどうであつたらうか。

1 三代目団十郎

栢庭には息子が生まれなかった。享保一〇年一月、初代の高弟三升屋助十郎の子、升五郎を養子として、徳辨と名のらせた（20）。若い頃から才能を発揮し、名跡を継ぎ、寛保元年一〇月、父と共に大坂へのぼる。しかし、大坂で病んだ団十郎は江戸へ帰って翌年二月、二二歳の若さで死んでしまふ。法名随善定覺性信士。芝常照院に葬る。

三代目は、二代目栢庭が在坂中に江戸でなくなった。祐天寺に位牌を納めなかったのはそのせいで、二代目の手が回らなかったからではないかと思われる。

2 四代目団十郎

四代目の出生に関しては、二代目と、堺町の茶屋袋屋源七の娘との子でるとする説と、同町の大茶屋和泉屋勘十郎の次男とする説がある（19）。そして、その、団十郎襲名についても、すんなりとはいかなかったようである。菩提寺常照院の口ききもあり、ようやく襲名が行われたのは、宝暦四年。三代目没後一〇年目であつた。

それから一六年後の明和七年、名を実子に譲り、更に六年後の安

永七年九月には、市村座『菅原伝授手習鑑』の松王に扮した後、剃髪して帰宅したという。その後は木場に隠居したというから、妻は二代目の姪だったが、二代目の目黒の別荘は譲り受けなかったものであるうか。四代目の法名は「廓誓悟粒随然法子」。「法子」という法名は、剃髪した俗人等に与えられる。漂い剃髪の様子からみても、四代目も信仰をもっていたといえるだろう。又、祐天寺に自己の戒名の他に、自分が施主となって人の戒名も納めているところから、祐天信仰ももっていたと思われる。

3 五代目団十郎

五代目団十郎白猿は、四代目とその妻の間の実子である。絶大な人気を誇り、又、文人達と交流が多かった。鳥亭焉馬は自ら「談洲楼」と号し、その自宅には農薬から家具に至るまで市川家の勢三榊を用いたという。自らも「花道のつらね」などと号して狂歌を良くした。寛政八年に舞台を退き、牛島に隠棲する。

山東京山は、『蜘蛛の糸巻』一四(21)でその理由について、団十郎が「いやしさ役者の家に生れし故、歳にも恥ず、女の真似するはいかなる因果ぞ」と、おしろいをつけさせながら涙を落としていた様子を描く。五代目の法名は「遺誓浄本臺遊法子」といい、四代目と同じく「法子」という名をもつ。仏道に心を寄せていたことがわかる。隠居後は、牛島の、六畳に勝手があるのみの小屋を「反故庵」と名づけている。京山の『蜘蛛の糸巻』によると、

三尺の仏壇ありて、円窓をひらき、内に小石を敷き、順戸もの、
 仏具あり。正面に仏像はなく、白紙一枚を張り、(中略)仏
 像なくて白紙あるを、兩人いぶかり問ひけるに、白猿うち忍み

つゝ、御兩人様よく見始へ。あの祇は西の内なりと答へければ、
 兩人はさらなり。おのれが若かりし心にも、おもしろく覚えて
 今にわすれず。(以下略)

伝統的隠遁者風の居を構えて仏道に心を寄せながらも、洒落つ氣を忘れない白猿晩年の様子がしのばれる。

白猿は文化三年八月半ばより水腫に罹り、病中に『念佛百首』を詠作する。

この百首をみると、白猿の念仏に対する考え方がよくわかる(22)。念仏の目的は、第一には勿論後世を助かることである。

此娑婆で打出の小槌もたんより

念仏申せ後世安樂 (六丁才)

しかし、その他の現世利益もあった。

念仏は命をのへて災難を

除き後生を助かるそかし (一九丁ウ)

念仏は一遍でも助かるが、ずっと唱え続けるべきものである。

一へんですみはすめども念仏を

たんと申せは早く助かる (二二丁才)

寝てもよし厨でもよし魚くふた

口でもよいそねぶつ唱えよ (二三丁才)

念仏は弥陀の利剣（両端を尖らせた利剣名号という、名号の書き方もあった）という意識をもっていた。又、ただ極楽を願うだけでなく、身を清めることを願う求道の気持ちももっていたようである。

念仏は罪をたちきる釘也

よく研済せ無我の砥石で

（九丁ウ）

念仏をうたがふ念は邪魔外道

みだの利剣てずた／＼にせよ

（二〇丁ウ）

弥陀仏と唱込たる魂は

火にをも不焼水に溺れず

（二〇丁オ）

右の一首は、明らかに、二章第3節で述べた、祐天名号と同じ、名号をもつ人は七難を助かるという利益を意識している。言葉も、『祐天大僧正利益記』の「火に投ずれ共焼けず。水に入れても濁れず」という文章と類似しており、これによつたのではないかと思われる。

又、白猿の信仰は、熱心な一方で、文筆もよくした人だけに、たいへん知的で、数理にも通じていたのがうかがえる。

弥陀仏と唱ふる人は助かると

天照神の御うたもあり

（二二丁ウ）

花になく鶯水にすむかはづ

つまる所は南無阿みたふつ

（二五丁オ）

「弥陀仏と」の歌は、本地垂迹思想をもとに、当時天照大神の作と伝えられる歌があつたのであろう。

「花になく」の歌だが、禅宗に「柳緑花紅」という言葉がある。柳は緑に茂り、花は紅に咲く。森羅万象そのままが、既に仏道に適つているということである。或いは又、天台宗には諸法実相という思想がある。これも同様の事である。これを称名にして歌つたものであるうが、思想を消化したうえで歌としてもこなれており、見事な作といえる。これは、全一〇〇首のうち終わりから四首めにあるが、しめくくりとしてもふさわしい一首といえる。残り三首のうち九八首めと一〇〇首めをあげておく。

くらきよりくらき道にもあかん堂

はるかに寺の念仏のこへ

（二五丁オ）

南無阿弥陀なむ阿みたふつナムアマミタ

南無阿みたふつ／＼

（二五丁ウ）

「くらきより」の歌。和泉式部の歌を下敷きしているが、「あかん堂」というのは、菩提寺、芝常照院のことである。御住職野村恒道氏によると、本堂が秘仏だったのと、本堂内が朱塗りなとで、こう呼ばれていたという。

死後眠るであろう菩提寺のことも忘れずに、最後一〇〇首めはひたすら念仏を唱え続ける、心にくい構成である。

全体を通して、白猿の、和歌・仏道両面にわたる深い教養、知識がしのばれる。又、願生浄土の痛烈な願いも伝わってくる。前半やや口吻そのままのきらいもあるが、それも素朴な趣としてとり、もとつと文学的作品として評価してよい作品ではないかと思う。

五代目の閑居の地牛島は、祐天上人が昔日、庵を結んだ地でもあつた。もしかしたらその跡を慕つたのかもしれないが、今のところ

それを裏づける資料はない。

4 六代目団十郎

六代目は五代目の庶子であった。寛政三年一四良の折に六代目を襲名。寛政八年、父五代目は引退。寛政一二年四月、「仮名手本忠臣蔵」に出演中、風邪のため三日めより舞台を退き、五月一三日、没す。二二歳。

この六代目は、五代目存命中に亡くなったにも関わらず、祐天寺過去帳に戒名は記されていない。若い団十郎の死で家中騒然とした為であろうか。

団十郎関係者の中で祐天寺過去帳に名が残る者は、五代目をもって終わる。七代目以降が位牌を納めなかった理由としては、

- (一)、時代がたち、祐天上人への信仰が世間で忘れられてきた。
- (二)、幕末になり、祐天寺も有力な後援者からの援助が途絶え、常念仏堂(位牌堂)も老朽化したので取り壊した。位牌を広く受け付けている態勢ではなかったと思われる。
- (三)、七代目は五代目の次女すみの子で、孫にあたる。五代目と年齢が離れ、五代目没時(文化三年)は一六歳であり、宗教的影響は受けにくい(23)(没したのは八代目の方が早い、五代目との縁は更に薄い)。

などが考えられる。

以上、祐天寺になぜ団十郎の名があるかについて考察して来た。理由はさまざま考えられるが、江戸文化の一翼を担っていた団十郎が、数代にわたり祐天上人を信仰していたのは確かである。祐天上人、祐天寺が江戸文化に与えていた影響について、まだ考察の余地

がありそうである。

末尾ながら、大切な御教示を戴きました清水正男先生、三浦広子先生、貴重な寺宝・資料の拝観を許され、御教示賜わった法蔵寺豊島克己師・常照院野村恒道師に篤く御礼申し上げます。

注

- (1) 常照院法名は、住職野村恒道氏がが過去帳より抜書したものを下さった。
- (2) 伊原青々園『市川團十郎の代々』坪内逍遙閣、東京市川宗家、大正六年。
- (3) 祐麟上人代(文政一二(一八二九)年〜嘉永六(一八五三)年)写。
- (4) 祐天上人伝記については、村上博了『祐天上人傳』(昭和四三年、祐天上人二五〇年忌記念事業委員会発行)を参照。
- (5) 内閣文庫蔵。上中下三巻合本。写本。
- (6) 巻九、二九頁。浄土宗全書一九巻所収。
- (7) 昭和九年、田村長流出版部発行。
- (8) 「団十郎の出自と信仰」『歌舞伎』二〇号、昭和四八年四月)。
- (9) 住職豊島克己氏に拝見させて頂いた。
- (10) 「初代団十郎の願文―解題と翻刻―」(加賀佳子・武井ゼミナール、『演劇研究』一七号)。
- (11) 加賀佳子「初代市川團十郎年譜(一)」『歌舞伎―研究と批評―』一四号、平成六年(二月)及び注(10)によると、

- 初代団十郎の成田信仰を示す資料は、これ以前にはない。この時期は成田山の江戸での初出開帳にあわせての公演だったが、これにより成田と初代との関係が生まれたのかもしれないという。
- (12) 文化五年版、祐天寺蔵本に拠った。
- (13) 上田霊城「近世代教説話の一考察」『印度學研究』二二卷一号、昭和四七年二月)には「近代仏教説話の・筆者注) 代表的と思われるもの数部について検討した結果、治病除災延寿福安産などの現世利益がテーマになっている。霊験説話の説話総数に占める比率は、鉦石集の三三%が最も低く、妙幡の地藏利益集の八五%が最も高く、他はすべて五〇%を越えている」とある。
- (14) 『明顕山寺録』(前出)による。
- (15) 昭和九年、早稲田大学出版部。
- (16) 「二世団十郎日記抄」(渡辺憲司・鎌倉恵子編『資料集成 二世市川團十郎』立教大学近世文学研究会編、和泉書院、昭和六十三年)に拠る。
- (17) 『中古劇場説』上(『燕石十種』二卷)及び『歌舞伎年表』参照。
- (18) 累劇の上演に関しては、中山幹雄「演劇目録と上演表」(『江戸東史談』二二四号、昭和六〇年)、東晴美「累狂言の趣向の変遷—「伊達競阿国劇場」以前—」(『早大大学院文学研究科紀要』別冊第二〇集、一九九三年)及び注(17)を参考にした。
- (19) 渡辺保『四代目市川團十郎』(筑摩書房、一九九四年)。
- (20) 廣瀬千紗子「三代目市川團十郎とその父」(『歌舞伎—研

究と批評—』五号、平成二年六月)参照。

(21) 『日本随筆大成』集二期七卷。

(22) 『市川白猿七部集』所収。国会図書館蔵本により引用。

(23) 七代目は菩提寺常照院に五代目が寄進した小灯笼籠の補修としてゐる等、信仰をもっていた人である。灯笼の銘を記しておく。「常照院什物十二世経誉代／五代目團十良納之／今十五世暢誉代／目文政五壬午歳／為先祖代々一切精霊菩提／奉願孫繁榮新補理之／七代目市川團十郎／五ツ之内」

歌舞伎

研究と批評

15

一九九五年六月二〇日第一刷発行